



ニンニク

いわき市内のニンニクの栽培地域

- 遠野町深山田



生産の歴史的由来

ニンニクはネギ科ネギ属の植物で、中央アジアが原産地ではないかといわれています。栽培の歴史は非常に古く、古代エジプト、ギリシャなど地中海沿岸の地域で栽培されていたことが記録されています。

東アジアには、漢の時代に中国に伝えられ、その後日本に渡来しました。平安時代に書かれた『本草和名』^{ほんぞうわみょう}や『和名類聚抄』^{わみょうるいじゅしょう}には、ニンニクに関する記述があり、古代から日本で栽培されていたことが知られています。

遠野町深山田地区で栽培されているニンニクは、栽培者が義父母から引き継ぎ、株分けを続けて長年栽培されてきたもので、栽培歴は60年以上になります。栽培者は「ニンニクは土地を選ぶので栽培が難しい」と言います。長い栽培経験の中では、土が合わない場所に植えて春先に出た芽が赤くなることもあるそうです。滋養



がつくとされ、薬味としても重宝するニンニクですが、形や大きさも土に左右されることから、株分けを年々繰り返している在来のニンニクは稀少と思われます。

栽培方法の一例

種球を植える前に、牛ふんの堆肥、油かす、野菜配合肥料を撒いて元肥とします。畝幅は約60cmとりませんが、平畝で栽培を始めます。



10月～11月頃に、株間約15cmで種球を植えます。

このとき、なるべく大きなものを選んで種球とします。暖冬の場合は12月頃に芽が出ることもありますが、冬のあいだはほとんど変化がありません。春先に芽が出て、10cmくらいの高さになったら、畝の両側から10cmくらい土寄せをします。そのときに野菜配合肥料を追肥します。

6月中旬から7月上旬に、掘り起こして収穫します。収穫した株は茎の部分をしぼり、軒下などに下げて吊しておきます。ここから食べる分だけを取って薬味として使ったりします。

特徴

現在主流のものよりも小ぶりで辛みが強く、鱗片の数は4～7個、大きさもまちまちです。また、このニンニクは、鱗片の数が4～7個、大きさもまちまちです。また、このニンニクは、球が白色であり、花茎（とう）を出したり、むかごを生じたりする特徴もあります。栽培者によれば、ラッキョウのような花が咲くそうです。



◆ニンニクのむかご



一般的なニンニク

遠野のニンニク

ニンニク

ができるまで



種球の準備

前年に収穫したものの中から大きめのものを選んで種球とします。



畑の準備・植え付け

10月下旬、5cmほど掘ったところに配合肥料を撒き、種球をジグザグに植え付けていきます。



支柱と追肥

ニンニクは冷涼な環境を好む作物のため、涼しくなってから植え付けますが、日当たりの良い場所を選びましょう。冬に新芽が伸びてしまっても寒さに強いので、さほど手入れは必要ありません。芽が10cmくらいになったらところで追肥と土寄せをします。



収穫

6月中旬～7月上旬に葉の色が黄色くなってくると収穫です。ニンニクを傷つけないよう周りから掘り起こしましょう。